

第15章

南方世界の魂舟の表象



南方世界の魂舟の表象

はじめに

ニューギニア北部を流れるセピック川の住民イアトゥムル族は原初の海から鱐が最初の島を創ったと考えている。この島はセピック川に浮かぶ草の島のようなイメージであるが、陸は創造神である鱐の背中に今でも乗っていると信じている。そしてカヌーの舳先に象られた鱐の表象は、この原初の時、すなわち鱐の背中に乗っている村や人間のありかたを象徴する（図15-1）。

カヌーを造るとき舳先には軽い木、艫には重い木を使う。父と息子がカヌーに乗るときは舳先には息子、艫には父が乗るが、木でいえば父は下の重い部分、息子は尖端の軽い部分に乗ることになり、一隻のカヌー自体が上下原理の合一と木になぞらえられた一族の継続を象徴する。

かつて首狩りに使われたこのようなカヌーは、男子のイニシエーションにも欠かせない道具である。儀礼の行われる男小屋には柵が作られ外からは見えないが、内部には大きな穴が掘られ水が張られる。そして柵の外から割れ目太鼓の音とともに祖先の霊が登場する。霊は装飾された頭蓋骨で柵の内部から繋がれた棒によって操られ、あたかも祖先の霊が踊っているように見える。祖先の霊には供物がなされ、それが終わると柵が壊される。すると祖先の霊はカヌーの舳先の彫刻に憑依し、首狩りや交易にでる男たちを護るのである（Appel 2005: 73-75）。

以下本章では、オセアニアと東南アジアを中心に、まず天地を分けて進む舟の表象を論ずることで、航海自体が世界の創造と関係していたという視点を提示したい。つぎにテーマ的には重複する側面もあるが、死者の乗る舟および魂の器としての舟という視点で事例をいくつか提供する（e.g. Vroklage 1936; Spiegel 1971; Appel 2008）。さらにオセアニアや東南アジアの比較事例としてよく取り上げられる北欧青銅器時代および鉄器時代の舟の表象を見た後、日本の古代も含め、「舟に乗ること」を根幹とした海民社会における舟、という問題を本書の結論として論じたい（後藤 2009b）。

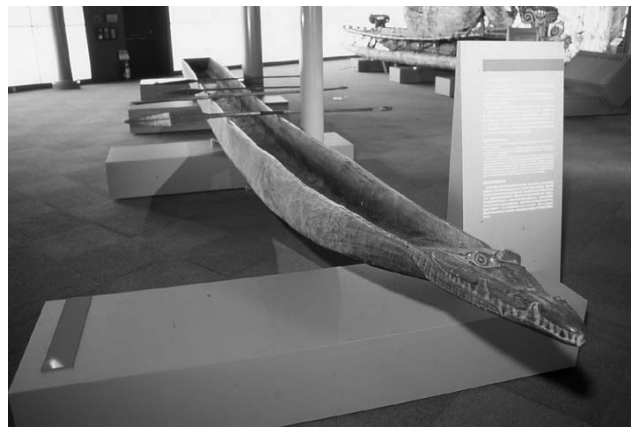


図15-1 ニューギニア・セピック川の川舟 ただし船尾は船外機用に加工されている（海洋文化館展示資料）

1. インドネシア・タニンバル諸島における舟の表象

ニューギニア島の南西海上に浮かぶインドネシアのタニンバル諸島は東南アジアとオセアニアの漸移地帯として興味ある地域である（図15-2）。タニンバルでは村自体が舟と考えられている。親族は互いに舟のクルーと考え、偉大なる家と呼ばれるロングハウスは舟の帆とされ、太陽の運航に従って東西軸に沿って立てられる。そして家の東半分は舵取りの部分、西半分は航海士の部分と呼ばれる。

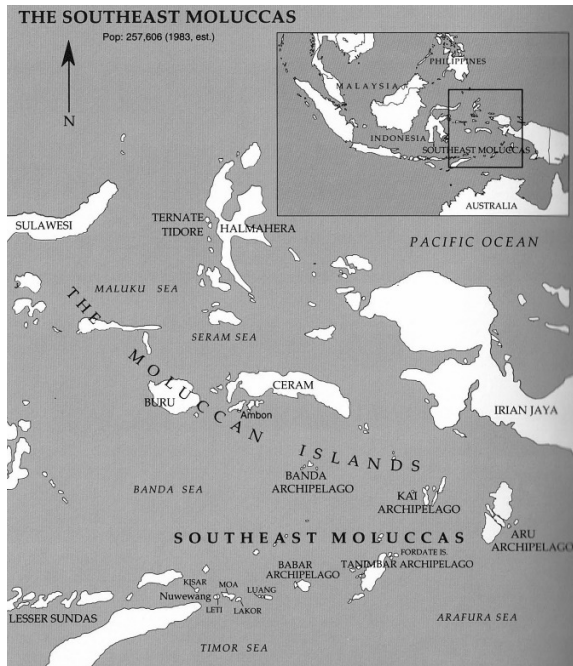


図15-2 タニンバル諸島 (Taylor and Aragon 1991: 230)

家はさらに4分割され、それぞれの部屋に出自集団が住まうが、最年長の集団は右の舵取りの部分割り当てられ家長の役割を持つ。彼らは「舵を握る者 (mekamulol)」と呼ばれ、家の家宝もその部屋に置かれる。また村全体もこのような家が集まっているので一緒に航海する船団と表現される (Appel 2005: 47)。

キリスト教化以前はウビラア (Ubila'a) という男女の神が「最高の祖父母・孫」として崇められていた。そして村は石の祭壇の周りに構成され、祭壇は舟型をしている (図15-3a & b)。そして儀礼のメンバーが舟の乗組員とされ、その家族は最初の乗組員の子孫とされる。祭壇の舳先は海側に向けて柱と供儀の石が建てられ、ウビラアの主要な祭壇が設けられる。舳先は艦には役割に応じて主要な儀礼者や村長のための石の座席が置かれる。

祭壇は村人の議論の場であり、また儀礼の踊り、そしてウビラアと祖先に対する供物が行われる。舟の名前は村の語源であり、その名前から遠くの祖先の国へと系譜が辿られる。一族を最初の海上移住者の子孫とし、また一族を起源のカヌーの名称で呼ぶのは、ポリネシア人であるニュージーランド・マオリ族にも同様の思想が見られる。

彼らのコスモロジーでは天空神=男神は棒状の木像で表され、地母神=女神は平たい丸い石や貝殻で示される。天の神が乗る舟は舳先や艦が飾られ、舟が乗る棒は平たい石=地母神の上に立てられる。それは天と地の合一を意味する (Appel 2005: 51)。この思想も後で触れるマオリ族のそれと同一である。

人間はモルモルソル mormorsol とデメイル dmeir という二つの原理によって生まれるとされる。前者は成長と体の動き、あるいは鼓動や呼吸に現れる活力のような原理で、顕著な現れが経血である。モルモルソルは人間のように死ぬが、それは死と誕生の循環を意味する。デメイルは人間の個性やアイデンティティーに関わる原理で、顔つき、体形、名前、声である。死後、人間のデメイル



a



b

図15-3 タニンバル諸島村内の舟型祭壇 (a: Taylor and Aragon 1991: Fig.VIII.2; b: McKinnon 1988: Fig.161)

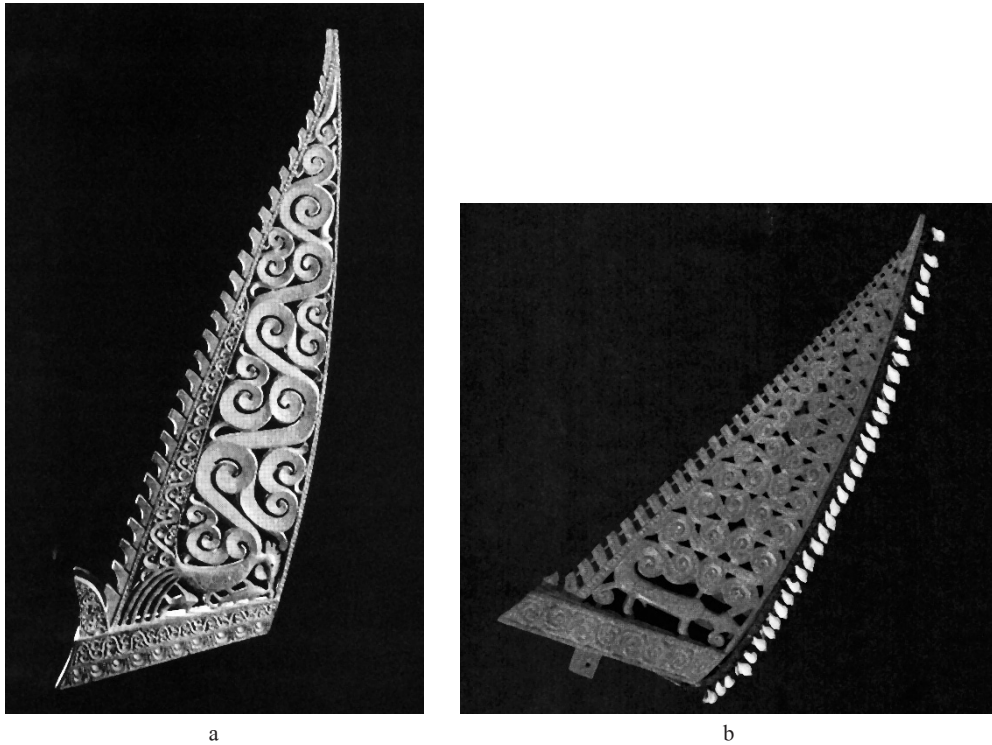


図15-4 タニンバルのカヌーの装飾 a: 鶏モチーフ (McKinnon 1988: 図158)、
b: 犬モチーフ (Taylor and Aragon 1991: Fig.VIII.3)

は去るがモルモルソルは社会的アイデンティティとして継承される。

舟そのものも生き物であり、舳先と鱧は鼻と踵、パドルは肩胛骨と呼ばれる。夫婦の間で妻は船、夫は舵取りという具合に家の普請と同様、船作りにも男女の結合が象徴される。たとえば下に横たわる竜骨(=女)に舳先材(=男)がはめ込まれるときに造船のもっとも重要な過程である。これは家の大黒柱を床に立てるときと同じである (Taylor and Aragon 1991: 233; Appel 2005: 48)。

そして原初の舟は雄鶏の姿をして、陽の光のように黄金の羽根を着ている (McKinnon 1988: 155)。航海カヌー用の舳先板に象られるのは雄鶏や犬、そして魚(しばしばサメ)であり、上ないし空に昇るような螺旋模様で表現される。それは波を砕いて、太陽に輝く鳥の羽毛である (図15-4a &b)。

タニンバル諸島の創世神話では象徴としての舟が色濃く表現されている。

かつて天と地が重なっていた。東の水平線で太陽が月や星を囲いこんでいたので闇が支配していた。あるとき英雄アトゥフが魔法の槍を持ち東の水平線に向かって船出した。英雄は槍で太陽を粉々に砕くと月や星が現れ、天地が分離して光が射すようになった。太陽や月の通り道ができたので夜と昼が定期的に訪れるようになった。この魔法の槍は船の舳先にくくりつけられた。槍は本土と島を切り分け、陸に突き刺さると水がわいてきた。

(McKinnon 1988: 158-159)

この神話にそって、舟の舳先にくくりつけられた槍は船が天地を切り分けながら進む様を象徴する。つまり道の大海原を航海する行為自体がこの世を分節し、光と闇を別け、秩序立てる行為であることを示すのである。

島民の起源は南西にある島とされるが、何度かにわたっていろいろな集団が到来しひとつになっ



図15-5 タニンバルの儀礼的航海 (Taylor and Aragon 1991: Fig.VIII.4)

たと語られる。これらの集団を統一するために村の中に石の祭壇が作られ、起源の舟を象徴する祭壇は、だいたい4～5 m位の大きさに30～40cmの高さがあった。祭壇は舟型であるが、舳先と艫板 (kora utu and kora muri) が実際に設けられる場合もある。

もともと海を渡ってきた人々の子孫にとって、村同士の連帯を示す絆は常に補強されねばならない。村同士の間では様々な食料や財宝、嫁を

交換するだけでなく戦争では連帯する。この関係は血盟で成し遂げられ違反は人身御供など血であがなわれねばならない。これらの関係を維持するために互いに舟で村を訪れる必要がある (McKinnon 1988: 161)。

訪れる舟の中では女たちが踊り続けるが、出航の前に帆が風をはらむように舳先に位置するドラマーたちは踊りの前から音を鳴らす。それにあわせて女たちは「高貴なグンカンドリのように踊る」(図15-5)。舳先に乗って手を広げ鳥が風をはらんで飛ぶように踊るからだ。そして儀礼の専門家が舟の真ん中に座り、船長として舟を正しい方向に導く。

村に着くと一連の儀礼が待っている。訪問者は最初、威嚇的な口上を述べる。そして訪問者は祭壇まで行進して祭壇の真ん中を槍で刺し、攻撃的な踊りを踊る。訪問者が歌うのは祭壇や村を破壊する意味の歌であるが、ホスト側は祭壇に敵を殺す魔法の物質をまいて訪問者のパワーを押し量る。この儀式は闘鶏のようなもので、女性の踊り手は極楽鳥の羽根、男性は雄鶏の鶏冠のようなココヤシの茎の頭飾りをつけている。

最初の3日間は以上のような儀礼が続けられるが、訪問者の歌はしだいに暴力的なニュアンスが薄れていく。そして4日目に舟型を形成して取り巻いていたホスト側が突然踊りの輪に入り、両者は隠していた村の宝を見せ合う。これによって互いに連帯を結ぶ価値があるかどうかを判断する。贈り物が釣り合うと判断されると両者が直線になって対峙し、贈り物の交換が始まる。両者は闘鶏のようににらみ合うが、無事終わると訪問者は財宝や嫁を連れて意気揚々と村に帰る。訪問の成功の証に舟の舳先には旗を掲げる (McKinnon 1988: 165-167)。

この儀礼的航海と訪問は、神話的過去の出来事、つまり海を越えて連帯してきたというシーンを再現する。連帯する村を定期的に訪れるこの儀礼は過去への旅であり、航海自体が世界を切り分ける、つまり「創世」の意味合いをもつ。

2. 天地分離と天翔るカヌー

ポリネシア創世神話の特徴の一つは天地分離の話である。水平線の彼方まで常に旅をしてきたポリネシア人にとって、水平線では天と海が合一する。とくに星を頼りに船を操作する航海師にとって海を航海することは星の間をめぐる天を航海することと同義であったことは想像に難くない。

タヒチでは英雄ルーが重なっていた天と海を押し分け、水平線の彼方にカヌーで船出する神話、またタネ神がカヌーによって天界に至る神話がある。別の神話ではタネはルア・ヌウ、アルル、

妻、2人の職人を連れて神の航海に出発した。彼らはカヌーで北東の風に乗って帆走し、すべての障害のない天を超えてカヌーが座礁したときアテア神の天涯に至った。テ・トゥム・ヌイ（＝根源）はオロヘナ山の頂上でカヌーを用意した。タネはそのカヌーをつかまえ天に投げあげ、それは十番目の天まで到達した。タネは晴れ渡った空をカヌーで航海したがアテアの天涯がそれに立ちはだかった（Henry 1928: 458-459）。

ニュージーランドのマオリ族のカヌー装飾も豪華である。舳先には透かし彫りした螺旋が彫られ、創世神話にまつわる神々の像が配置されている。とくに戦闘用カヌーが念入りに作られる（Evans 1997, 1998, 2000）。カヌーはそれぞれが名前を持ち、ほとんどが女性である。舳先飾りは通常のカヌーより豪華に装飾され、島に最初に到達した祖先に由来する（Nelson 1991: 35）。反り上がったカヌーの舳先装飾に見られる渦巻き文は光と知識が地上に出現する様を象徴している。渦巻きがしばしば分離しているのは地母神パパと天空神ランギ間に繰り広げられる天地分離神話を意味している。二人の堅い抱擁から神々が生まれ、それを無理やり切り離したことによって天地が分かれたとされるマオリの神話が背景にある。

図15-6の舳先材は基本的にランギとパパによる天地の分離を表している（図15-6a & b）。基部に寝ているのはパパでその下に死神が半身鯨神の形で表されている。戦闘用カヌーは死と関係するので、これは最初に殺された人間カエの記憶に関係する。後ろには地震の神ルアモコ（モコ＝トカゲ神）がいて、それは、天を向くように仰向けになった地母神パパの胸に抱かれている。舳先には三つの像が一行になっている。最初は人間カエ（kae）と戦争の神トゥマタウエンガが振り返って創世神で海の神タンガロアに戦闘の踊り、「ハカ」のように舌を出して警告をしている。ここではトゥマタウエンガはタンガロアと永遠の戦いをしているのだ。豊饒神タネは渦巻きの中に彫られ、カヌーをのぞき込むように風の神が彫られる場合もある。

マオリでもう一つ重要なのは、カヌーが各部族の祖先と密接に関わる点である。それは同じカヌーに乗ってきた人々が各地に住み着いて今の部族の祖先となったとする点である。各部族は原初カヌーの名前から代々祖先をたどる系譜を語り継ぎ、いかに祖先がハワイキの国からサツマイモなどの作物をもたらしたか語るののである（Simmons 1976）。この思想は今日まで受け継がれ、マオリ人が現代に生きるアイデンティティーの基盤となっている。



図15-6 ニュージーランド・マオリ戦闘用カヌー（オークランド博物館）

3. 死者の乗る舟・棺としての舟

インドネシアから、ニューギニアの海岸部、そしてメラネシアの西部にかけては魂の船の表象が発達する。オーストロネシア語で天の川は道 (path) という意味であることが一般的である。言語学者 R. プラストの再構成では PMP (Proto-Malay-Polynesian マレー・ポリネシア祖語) における *zalan は単に道ではなく「人間によって動物に対して作られた道」という意味が与えられている。

ルソン島の北、台湾との間のバシー海峡に浮かぶカタナウアン (Catanauan) 島の洞窟にある舟型墓は今から約1000～1300年前の間と推定されている。この洞窟は南東に入口が向いており、それは乾季に天の川が見え始める方向と一致する。さらにそのとき見えるシリウスやカノープスの方位を向いているような洞穴もある。時期は1月の中頃に曇りがちのフィリピンで短期間空が晴れて星空が見えるときである。天の川は2月の中頃まで見える。死者の魂が天の川を通過して来世に行くと考えられているのはこの時期ではないかと考えられる。

さて魂の舟の民族事例で有名なのはボルネオ島ダヤク族における魂の舟の表象である。この舟には生命の木、そして神話的動物であるサイチョウや水蛇が描かれる (図15-7)。さらにルソン島のイフガオやボントック族、スマトラ島のバタク族、スラウェシ島のトラジャ族のような内陸の民も、家ないし棺にカヌーを象ったとされる (図15-8a & b)。とくに位の高い者が舟型棺に埋葬された。バタク族では舟型棺が住居の軒下にぶら下げられ、遺骸からでる死汁を体に塗ることで、そのパワーを継承すると考えられた。死汁を塗ったり飲んだりする風習は舟型棺の分布と相まって、ニューギニア方面まで見られる (棚瀬 1966)。

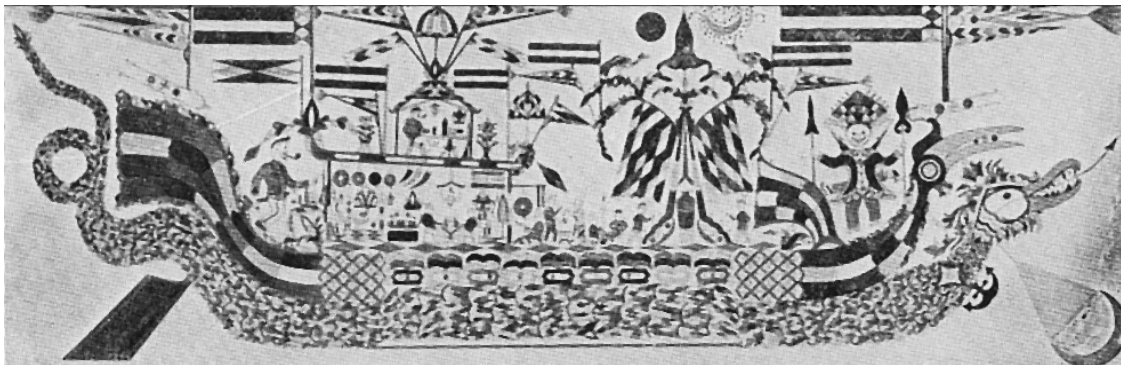


図15-7 ボルネオ・ダヤク族の魂舟 (シェーラー 1979)



a



b

図15-8 フィリピン・ルソン島・ボントック族の舟型棺 a: 洞窟内に積み上げられた舟形棺、b: 地下世界を象徴するトカゲが彫られた棺

さらに死者の舟の意匠はパチック布にも織り込まれる。この魂の船は、マレーの病舟（厄払い舟）にもその影響があるとも言われている。厄払い舟はカヌーに悪霊とくに病気をもたらす悪霊を封じ込めて下流や海に流す風習である（図15-9）。



図15-9 マレー人の厄払い舟（海洋文化館展示資料）

メラネシアでは死者の魂の赴く先としてしばしば具体的にある島が示される。たとえば筆者の調査地ソロモン諸島のマライタ島、ランガランガ・ラグーンでは、死者

は近隣の小島に埋葬されるが、一部の位の高い者の頭蓋骨はその後村の祭壇に戻される。祭壇に頭蓋骨が奉納された者も村が移動したりするときは、埋葬の島に戻され、死者の魂はさらに遠くの死者の島に旅立つとされる。その行き先であるガダルカナル島のマラウ湾小島では、普通に死者たちが生活していると語られる（後藤 1996: 258-273）。同様の思想はソロモン諸島に見られることが各地から報告されている（Bernatzik 1935; 棚瀬 1966）。

沖の小島に一時死体を安置する風習と関連して死体化生型のココヤシ起源神話が語られる。死期を悟った父が息子に遺体をカヌーに乗せ、近くの小島に安置させ、数日したら見に来いと遺言する。息子が戻ってみると父の頭からココヤシが生えてきた。この種の話にはオーストロネシア世界に広がるココヤシ＝頭蓋骨のシンボリズムが背景にあり、首狩り文化複合の一端をなすであろう（後藤 2002; 山田 2015）。この話は隣のガダルカナル島では叔父と甥の話に変換されている。マライタ島は父系だが、ガダルカナルは母系なので男子は母方の叔父を継承するからである。

ソロモン諸島のサンクリストバル島では、死者の骨は鮫型の器に入れられ、カヌー用の糊で密閉されて海に流される（図15-10）。この浮かぶ棺に最初に近づいてきた物が祖先の魂の化身である。たいていは鮫だが、蛸、イカ、亀あるいは鰐のこともある。鮫は一般に祖先の化身として畏敬されるので、鮫に化身した魂は救済されるが、下等な動物に取り憑かれて化身した魂は浮かばれず、悪霊として振る舞うと信じられている（Fox 1924: 108）。

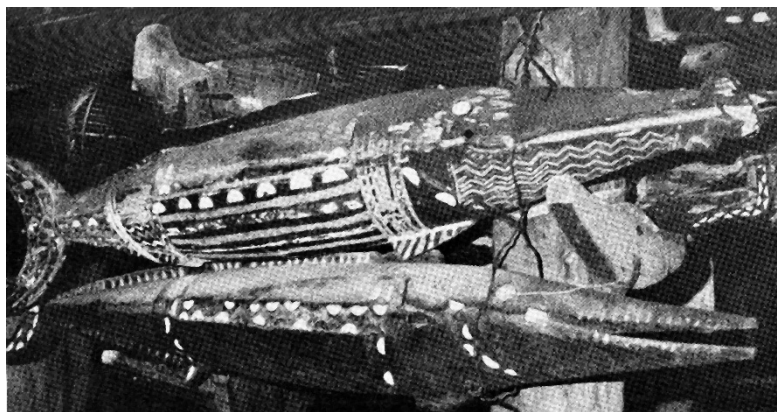


図15-10 ソロモン諸島の舟型納骨箱（Mead 1973）

4. マランガン様式

ビスマルク諸島のニューアイルランド島で発達した木彫芸術はマランガン malangan と呼ばれる (Appel 2005; Gunn and Peltier 2006)。南太平洋芸術の極致と言われる豪華な彫り物で、第12章で述べたように経緯は不明だが、小笠原諸島で江戸時代に記録された絵図にマランガン様式と思われる仮面が描かれているのを指摘した。

そもそもマランガンとは死者儀礼と関連する。つまりそれは祖先儀礼の際に披露される仮面や木像を全体に呼ぶ名称であり、同時にこのような飾りを作る神聖な行為および死者への愛を表す媒体全体を呼ぶ言葉でもある。

メラネシアでは一般的であるが、死者がでると直後の葬式ではなく、その後の用いが数年も続く。霊を弔う儀礼で使われる割れ目太鼓の深い音色は聞いている者に死者を思い出させるが、数年後には肉体が完全に滅び、死者の魂は純粋な霊的存在、靈力に満ちた存在となる。しかしそのままでは危険な状態であるので、死者によって植えられたすべての作物が刈り取られ、また死者の持ち物が破壊される。これらの行為は「皮を剥ぐ」と表現され、生者の世界に死者が残した者は根絶され、魂は完全に肉体の束縛から逃れるとされる。

マランガンが作られるのはこのときで、それは死者の「皮」を提供し、それに魂を憑依させて制御するのである。これによって彫刻は生命を得るのだが、それは死者の霊が乗り移った木彫が森の奥に運ばれ、そこで朽ち果てるに任せるためである。

さてマランガンの中でカヌーを模した作品がある。それは数人がカヌーを漕ぐ型式に彫られた木彫である (図15-11)。これは漁に出て遭難した、あるいは鯨に食われて命を落とした男たちの供養にと作られたマランガンである。

このようにとくにメラネシアでは棺がカヌー型をしているのに加え、カヌーと類似した装飾が割れ目太鼓、儀礼用の木椀、そして骨壺などに共通に見られる。カヌーの形態自体も魂の器である。それらにしばしば彫られる鰐が創世神話や魂の旅と密接に結びつくのはセピック川の事例などですでに見たとおりである (Badner 1972)。

割れ目太鼓の音色は祖先の声あるいは魂を呼ぶ音とされ、カヌー、割れ目太鼓、木椀、骨壺などに共通する位相幾何学的構造は「中空」である点である。カヌーをパドリングする際、パドルがカヌーの舷側に規則的に当たる音に合わせ、漕ぎ手は歌を歌うのだ、と筆者はソロモン諸島で聞いている。



図15-11 マランガン様式の死者の舟 (Gunn and Peltier 2006: Taf.69)

つまりカヌー自体が巨大な割れ目太鼓なのである。また筆者は同地で大量に食料を加工や洗浄するときにカヌーを器にして行うことも目撃している。つまりカヌーは食料を盛る器にも関連する。このようにしてカヌーを棺にすることとカヌーや魚を象った骨壺に骨を収めることも共通の思考方式になるのである (e.g. Mead 1973)。天地分離のような創世神話に結びつくカヌーは魂が生まれ、また魂が帰る場所、「魂の依

り代」であった。

5. 祖先の国とポリネシアのハワイキ

祖先の国、作物や祖先の起源地、あるいは死者の行く場所として、メラネシアのアドミラルティ諸島付近ではヤップ Jap (Meier 1907)、ミクロネシアのカロリン諸島ではユール Yur (Böhne 1937; Goodenough 1986) と呼ばれていた。そして西部ポリネシアではプロトゥ、東部ではハワイキと呼ばれる地が一般的である (Geraghty 1993)。

西部ポリネシア・トンガの創世神話では一般にプロトゥの支配者はヒクレオとされるが、プロトゥはネガティブなだけの土地ではない。なぜならトンガの神話にはプロトゥから作物がもたらされたとされるからである。トンガでは神ヒクレオが支配すると言われる死者の国プロトゥへの船旅の話がある。

四人の神がプロトゥへ行こうとする。途中の岸で老いた女神と一緒に乗せてくれと頼む。しかしすでに船は満杯だったので断ったが、女神はどうしても乗せてくれ、自分が行くといいいこともあると譲らず、とうとう彼女も乗せてゆくことにした。彼らはそこでいろいろな試練を受けるが、女神の助けで生き延び、戻るときにヒクレオの秘匿するヤムイモ、タロイモあるいはある種の魚を盗んで来た。(Gifford 1924: 155-164)

トンガのヒクレオはハワイなどで冥界を訪ねたヒクという男と同じ系統の存在であろう。ヒクは死んだ恋人の魂を追ってカヌーで水平線の先にある冥界にたどり着いたとされる (Thornton 1984)。ハワイでは彼岸の国をカヒキ (タヒチが語源か?) とするが、その他の東部ポリネシアでは一般的にハワイキと呼ばれる。ハワイはハワイキを語源としているので、ポリネシア人はハワイから拡散したとは、かつてハイエルダールなどが唱えた説である。

ところでポリネシアのマルケサス諸島には、東から西へ向かう旅の話がある。

首長が死んだとき盛大な葬式を催した。たくさんの花が供えられたが、太陽が昇るとしぼんでしまう。そこでクラという鳥の赤い羽で飾りを造ろうとして、英雄が遠く東へ旅だった。彼は2人の義理の息子を連れ、大きなダブルカヌーで140人の漕ぎ手を乗せて出発した。しかし航海は7カ月かかり、飢えて80人も死んだ。しかしようやく島にたどり着き、鳥罟を作って貴重な羽毛を得た後、1年がかりで戻った。(Von Steinen 1988: 11-12)

マルケサス諸島では死後の魂が赴く土地はハワイキと呼ばれていた。ただしそれは、遠い島あるいは地下界とも天上界とも捉えられていた。また方位についても西あるいは東などさまざまな情報が入り乱れ、具体的に比定することは意味をなさない。

死後の世界は海の彼方であるという思想と関連して、魂はカヌーのような形をした棺によって流された (e.g. 図15-12)。たどり着くべき死者の島は幸福の島として捉えられていた。この島はマルケサスではヌクヒヴァ島の西方海上にあるとされた。島民がこの幸福の島を大型のダブルカヌーで見つけに出かけ、戻ってこなかったという話がある。

天上界に向かう魂もカヌーが必要であったとされる。西欧人がマルケサス諸島の溪谷にある墓を訪れたときの話がある。そこには偶像があり、数歩離れたところには4隻の立派なカヌーが置かれ



図15-12 ハワイで発見されたカヌーを利用した棺 (Kirch 1985: Figure 204)

ていた。そのカヌーはアウトリガーが備えられ、人間の毛髪、珊瑚、そして長くて白い吹き流しによって飾られていた。艫では櫂を持ち、装飾された人間の偶像が舵を取っていた。もっとも立派なカヌーの艫に座っている舵取りは、敵に殺された司祭であると人々は語った。またカヌーの中や周りにはたくさんの死体があった。首長、司祭あるいは戦士のような傑出した人々は、天にたどり着くための漕ぎ手に、人身御供がたくさん必要であったからである (Frazer 1994 Vol. III: 364-366)。

6. ミクロネシアの死者と豊穡の島

キリバス (旧称ギルバート諸島) では、魂は北に行き、島から島へと飛び跳ねてゆくとされる。魂はそこで審判を受けねばならず、行いが良いとされると幸福な死者の国ボウルに到着する。そこで魂は食料を与えられ祖先によって長寿が祝福される (Mackenzie 1930: 169-171)。

マーシャル諸島民が信じるには、魂はラロクと呼ばれる守り神のいる珊瑚礁を越え、恐ろしい悪魔の地に至る。もし悪魔に捕らえられなかったら、魂はさらに西に行つてエオレロックという天国の島にカヌーで到達する。大事なことは魂が大きなカヌーで現れるか、それとも小さなカヌーで現れるかとされる。もし大きなカヌーで現れれば、魂の存続が約束されるが、小さなカヌーであれば最後の審判が下され魂は消滅する (Frazer 1994: 87)。

魂の舟の概念はパラオでも見受けられる。魂はカヌーに乗ってピリル島の南東にある見えない島に運ばれる。またポナペ島の来世は島の西側かあるいは海底にあるとされる (Mackenzie 1930: 171)。ヤップ島では魂は天国に昇るが、天国自体が海に囲まれた島のようにイメージされていた。そこでは住民はカヌーに乗って魚を捕まえている。あらゆる作物が実り、それらはあとで地上に植えられた (Frazer 1994: 167)。そして中央カロリン諸島には、南の島ユールの観念がある。作物、とくにパンの実はここから来たと語られる (Goodenough 1986)。南にあるとされる伝説の島は与那国島のハイドゥナン (南のドナン=与那国) の伝説を想起させるが、カロリン諸島でも魂は南に航海し、祖先の国にたどり着く (Böhne 1937: 87)。